

令和4年度第1回諫早市まちづくり総合戦略推進会議会議記録（要旨）

日時：令和5年1月20日（金）

10:00～12:00

場所：諫早市役所5階 大会議室

【会議次第】

- 1 開会
- 2 委嘱状の交付
- 3 市長あいさつ
- 4 協議事項
 - （1）デジタル田園都市国家構想について
 - （2）諫早市まち・ひと・しごと創生総合戦略の取組状況について
- 5 閉会

【要旨】

■協議事項（1）デジタル田園都市国家構想について

（事務局）

＜資料1の説明＞

（委員）

国の政策では高等教育において、デジタル人材の育成という流れが強く出ていて、文科省の補助金関係もついている。本学もこの4月からデータサイエンスに関わる科目を強化している。

一気にデジタルトランスフォーメーションの認識が変わってきており、教育現場では小学生へのタブレットの配布とか無計画だったのが一気に前倒しになって進んでいる。そうなる则一番重要なのは光ファイバーも含めて、いつでもどこでも情報端末であるスマートフォンでアクセスできる環境を作っていくというところがすごく大きな意味をもつ。

市長も触れられたように、光ファイバーの全市へ整備、これは観光の側面からも非常に意味がある。例えば観光名所などでのガイドで、公共交通や将来的にはオンデマンドの運行、自動運転などへアクセスできるものをいかに作っていくが非常に重要。

今の学生はスマートフォンでレポート書いており、キーボードを使うとスピードが落ちる。さらにはGoogle翻訳とか音声入力というのが主力になっていくなど、デジタルトランスフォーメーションでソフトウェア的な面で私達の生活がどう変わっていくのかというビジョンをきちんと捉えていけないといけない。

また、購買行動や消費行動にも大きく変わってくるので、そういうところをイメージしながらこれからの諫早が目指す新しい生活を提案していくことが、移住定住促進にもつながる重要なポイントになる。

（事務局）

光基盤の整備については、諫早市は山間部まで光ファイバーが通っていなかった。そのようなこともあり令和2年度から整備を始めた。市が補助を行い通信事業者が整備を行っている。今年度も整備を行っており、家が建っているところは光ファイバーが通っているという状況まで持っていける。通信の基盤を整備したことで、民間の通信事業者が提供するサービスにより、各家庭からの通信速度1G以上が保てるような状況ができる。

ただし、交通サービスなどを考えていく上では、家庭からのアクセスだけではないので、無線の整備が必要になっていく。デジタル田園都市国家構想に併せ、次年度以降、総合戦略を改訂していく中で、交通サービスなど様々な事業を見据えながらデザインを描いていかないといけないと思っている。

（会長）

事務局の方からのインフラ整備については計画的に整備したいということだが、サービス、コンテンツの内容について、市民にどうこのDXを使ってサービスを提供していくかというビジョンが必要ではなかろうかと思う。

（委員）

デジタル田園都市国家構想と地方創生の本学の取り組みでは3点ほどある。

1点目はeスポーツを活用した実験を4月から始めている。

子供たちは生まれた時からネット社会であって、eスポーツやゲームをほとんどの方がしている。そこからデジタル人材育成につながらないかと大学で人材育成プログラムに取り組んでいる。

例えば、諫早であれば半導体工場への人材の供給、起業、まちづくりにもつながる。高校、中学の現場では、理科離れ、数学ができない生徒が増えてきている。ある病院の実験でeスポーツにより学力が伸びたという結果が得られており、デジタル田園都市構想に繋げるような若い人たちの気持ちをしっかり捉えながら取り組みたい。

2つ目に昨年の9月ぐらいから、県内の工業高校および私立高校でのeスポーツを通じた地域課題環境人材プログラムに取り組んでいる。これは画面や映像とかの技術を使ったテクニックを学ぶと同時に、人の心の痛みや感謝の気持ちなどのモラル教育や、人とお金とコンプライアンスの関係などの教育を行った。中学、高校で行い、大学生を派遣して教えている。デジタル人材はSNSの中傷などもしっかりわからないといけない。大学としても7年間、もしくは、10年間かけてしっかり育てたい。これが大学の力だと思う。

3つ目に、若者定着地域課題探究プログラムで定住人口を呼び込むまち作りの取り組みを行っている。都市部にも限界集落が発生していて、統計では長崎市にも存在している。そこで大学生と地域の住民の方と一緒にDXを使った無人化店舗ができないかと思っている。POSデータを使ってお年寄りに顔認証プログラムによるキャッシュレス決済を導入するというようなこともやっている。

デジタル人材の育成については、大学の役割と認識しているのでぜひ一緒に取組めたらと思う。

(会長)

eスポーツを通じたデジタル人材の育成にも力を入れているとのことだが、昔の感覚では遊びと捉えてしまいがちだが、そういうものが論理力とか国語力、そういうものを育成しながら、子供たちが育つということか。

(委員)

eスポーツというと、保護者からは「家にこもって出てこなくなる」という声もあった。ただ、しっかり管理をしていくと変わる。生まれた時からネットになれていて、コロナ禍で密になってコミュニケーションがとりにくくなってきたので、例えば、お年寄り等に子供たちが教えるなど、コミュニケーション力の育成になる。

(委員)

飯盛西小学校の6年生を対象にドローンの教室を行う。子供たちが大人になったら車で空を飛んでいるかもしれない。子供たちに対して、今からそういう技術に接してほしいということで実施する。eスポーツとはちょっと違うと思うが、スポーツとして遊びながらドローンに接してもらい、対応できる子どもになってほしい。それがどうデジタル田園都市に結び付いていくのかというのは、私の中ではよくわかっていないが力を入れていってほしい。

(会長)

社会課題解決について、教育分野でのデジタルの導入や現場で苦勞されている中で、これはデジタルで解決できるのではないかなど、意見等はないか。

（委員）

子育てに関わる期間は大人にとっても20年と長丁場で、デジタル田園都市のメリットを子育てにもっと重点を置くことは、子育てのしやすさや定住のしやすさなどに大きく関わってくると思う。

その中で第2期総合戦略の基本目標3の出産子育ての希望をかなえるとあるが、実際は「希望がない」というより、「困り感がすごい」と感じており、そのような保護者の意見も多く、親の困り感をすぐに相談できるのは重要なこと。その「すぐに」ということがデジタル化の強みで相談できる場所があればよいと思う。先日もスマホの使い方で子供が親を殺めてしまうという悲しい事件があった。そういうときに親が子供と密室にならずにすぐ相談できる機関があって、そこから不安を解決できるような機関に結びつけ、保護者が「こういう支援がある、ああいう支援がある」と知ると、「怖い」「どうしよう」という気持ちを子供にぶつけなくていい。デジタル化によって親が何か小さな事でも相談できるようなことができればよいと思う。

（事務局）

すぐに相談できるという点ではすくすく広場がある。そこは子育て世代包括支援センターとして相談を受け付ける機関。もっと周知を図るとともに、すぐに相談をできるような、そういうアプリを使うなどにもチャレンジしていければと思う。

（会長）

青年会議所は地域課題の解決をいつも念頭に置いて頑張っているがいかがですか。

（委員）

DXというと、人口減少や人手不足をDXで補っていきたいというのがイメージとしては大きい。都心部や大手企業がこういう取り組みは先導しているので、私の会社では、都心部や大手の企業を参考にしている状況で、既にその格差が広がっているという認識。仕事以外では、例えば、子育てや教育というところでも、デジタル格差というのは既に都市部と広がっているようなイメージを持っているが、その辺の認識やそれに対してもどういう対策をしていくかというのが今後重要になってくるのではないかなと思う。

（会長）

地元九州の企業はDXが非常に遅れてきているという現状ですね、それでどういう対策をしたらいいのかということで、何か事務局ございませんか。

（事務局）

デジタル格差が都心部と比較して生じているということについては、今、デジタル推進室が市のDX推進計画というのを作っており、民間企業と連携し、公民館などで高齢者の方を対象にスマートフォン教室を開催するなどそういう取組みからDXの推進を図っている。

（会長）

産業振興という意味では人手不足、これは各企業が取り組むことと。インフラ全体整備は行政の方で準備してもらうこと。両方あると思うので、その辺を事務局の方にはよく研究をいただきたい。

（委員）

ネット回線については、高来町では20年ぐらい前、市長に直接お願いしたがやっとネット回線が来た。ネット回線が必要というのを皆さんも段々と感じて来ているところ。先ほどから言われているように、子供たちの能力を開発するというのもあるが、交通が不便なところなどは、ネットショッピングで翌日に物が届くなど、いろんな解決法に繋げていけば人が来ると思う。それと今の若者が住むときにはネット回線の有無が大きく関わっている。ネット回線がないと人は住まない。だから諫早には住まないという状況があった。国がデジタル田園都市ということでやっと気づいた。諫早もそれに則って進めていただききたいと思う。それともう一つ大切なことは、それによって個々の分断化が起こるが、いかにコミュニケーション能力を育てるかという視点も必要。ネットではすごく能力を発揮しても、ちゃんと話すことができないということもあるので、なるべく集団行動、eスポーツもたくさんの人が集まって行うこともできるので、大会とか、いろんな形で集団をなるべく作って、コミュニケーション能力を育てていくというのは特に田舎では必要なもの。デジタル化も大事だがコミュニケーション力を育てることも大事なので、考慮して進めていっていただきたい。

（会長）

他に何かございませんか。

（委員）

防災DXというのがあって思ったが、若い人たちはデジタルネイティブで慣れているが、高齢者は環境を整えても使えない、ネット検索は出来てもネットでお買い物は出来ない方たちが結構いるのを最近感じている。無人のレジだったり、支払いに何を使うかなど聞かれたり、それが嫌だからマルタカに行く。そういう話も聞く。防災アプリはあるけど、アプリを入れていない人は無線を聞かな

いと伝わっていなかったりもする。テーマとして、誰１人取り残されないとあるので、進める一方で、高齢者対策ということが必要だと思う。

（会長）

情報データに触れない高齢者の教育というも非常に大事。例えばいくつかのボタンがあり、押せば情報がでるような簡単な仕組みの開発も必要ではないか。高齢者がデジタルから取り残さないというような方向性について事務局からなにかないか。

（事務局）

デジタル田園の構想のなかでは、デジタル基盤の整備のほかにも取り残されないための取り組みというの也被えられている。高齢者に対するスマートフォン教室を１年ぐら前に地域の公民館で開催したが参加者が少なかった。そういう取組を今後も広げていき、高齢者にも興味を持ってもらうようにしたい。それと、高齢者はスマートフォンにタッチするという作業が難しいと聞く、最近押した感じがする端末もあるなど、今後いろんな技術進歩もあると思う。高齢者に使いやすいというの也被え大事な視点だと思うので、次期ビジョンの中に出していきたいなと考えている。

（会長）

山林会として地域のデジタル化について意見等ないか。

（委員）

目標として勉強したいので、デジタル化の具体的な事例などの情報発信をしていただきたい。

（委員）

デジタルの力を活用とある。今からどういうふうに活用するかというのがまだはつきりわからないので何とも言いようがないが、私達もどちらかというと半分アナログ世代。こういうものを進めていくには、やはり人材育成が大事。私は周りに若い人がいるのでわからないところは聞けば、若い人が教えてくれ、それで少しずつ覚える。若い人がわからない高齢者に教えるなどそういう講習は大事なことだと思う。

現場では、どうしても手作業や人材不足などいろんな問題を抱えている。デジタルというと机の上の話のように思っているが、若い人たちがこれから先も現場で働くためには、現場設備のデジタル化が必要となるが、投資をするのにものすごくお金がかかるので、補助とかリースとか、中小企業を支えてもらいたい。

（委員）

諫早は長崎県の中央であって、すごく交通の便もいい。私の長男が1歳ぐらいの時に近くに子育てサロンがなかったので自分たちで作った。最初はお母さんたちが土台になって子育てサロンを作り最終100名になったが私もそれで助けられている。諫早のお母さんは転勤族が多く、今はコロナ禍で孤独なお母さんも多いのでデジタル化で相談でき、横の繋がりができたらよいと思う。

お仕事をしたいけど、子供が小さい、実家がこちらにない、保育園に預けても熱出したりするので仕事を辞める、したい仕事を我慢している、そのようなお母さんもいらっしゃるので、そういう方が自宅で出来る仕事、ママたちが文字だけでできる仕事など、デジタルだと企業がそういう能力のあるお母さんたちに仕事を依頼するというのができる。子育てがしやすい諫早だからこそ、そういうママたちを呼んで、ご主人も諫早から出勤する。これらは全部繋がっていて、仕事がある、仕事があるから結婚につながる素晴らしい出会いができる、出会いがあって、出産して子育てしやすい街、そしたら自分たちの子供もそのまま諫早に住んでいられる。DXを活用して、魅力的まちづくりなど、総合戦略の4つの目標を実現出来たらいいなと思う。

（委員）

我々もわかりやすいところからやっていこうかなと思っている。83才になるが、ようやくLINEを覚えた。面白いから電話機能だけでなく結構使っている。年寄りでも楽しめるやり方、さきほどあったゲームをつかったやり方などがあればよい。今、高齢者の包括支援では、健康問題ばかりやっているがそれだけでは足りないのではないか。そこにDXをつかって楽しみをもって高齢者の支援をすれば、関心度が高まって行って、本当にデジタルの世界に入っていけると思う。

（会長）

先ほどからお話があるように、IT化、技術化っていうのは、人との繋がりですね、これを強化するツールであるということ、それからコミュニケーションのツールであること、そしてそういうことを通した繋がりとかコミュニケーションの中から社会課題を解決するとより良いものになる、そういうチャンスじゃないか、そういう意味で非常に重要なことを含んでいる。

今朝の新聞の長崎大学のメタバースを使った取り組みが紹介されていた。メタバースの空間は意志があれば誰でも入れるのでそこで教育し、それによって課題の解決を図っていく。諫早市もいろんな課題があるわけだけど、その課題に意志があれば誰でも入れる。そういうメタバースの世界をこのDX化を機会に導入していったらどうかと感じた。

（事務局）

先ほど子育てについての相談できる機会について、市のホームページとは別の子育てに特化した子育てネットというWEBサイトを開設している。そちらで保育所や学童、すくすく広場の紹介など行っておりますので活用していただければ。

■協議事項（２）諫早市まち・ひと・しごと創生総合戦略の取組状況について

（会長）

協議事項の（２）諫早市まちひとしごと創生総合戦略の取り組み状況について事務局から説明をお願いします。

（事務局）

＜資料２の説明＞

（会長）

この件についてご質問ご意見等を伺います。

（委員）

基本目標４の魅力的なまちをつくるという項目の中の道の駅について、今RVパークは全国的に増えつつあるが、道の駅に設置される予定はあるか。

（事務局）

道の駅の整備につきましては、本日担当課が出席していないため、後日改めて回答する。

（委員）

RVパークでは、電源を借りて車中泊したり、お風呂に入ったりできる。全国に315ヶ所RVパークがあり、そこを拠点に遊ぶことが出来る。長崎の県央に位置する諫早に、今回、道の駅ができるということですごく期待をしている。ただ道の駅ができましただけでは、物足りない気がするので、できるということであれば非常に嬉しい。

もう一つ、大型商業施設の進捗について、諫早市民の期待感心の一番はそこにあると思っている。新聞報道では何か課題があるようだが、話できる範囲でよいので状況を伺いたい。

（事務局）

大型商業施設の建設については、様々な手続きや協議が必要で、それを順番に進めているという状況だと聞いている。

（委員）

基本目標の3の中のお見合いシステムの閲覧件数とあるが、例えばホームページを見たと言うと、すごく興味があつてみたという人もいれば、ただ職員が見ただけというのもカウントするのではないか。また、道の駅についても、令和6年度に設置とされているが、予定通りに完成すれば達成する。こういうのを指標にするのはどうなのか。数値としてきちんと表れる目標が必要ではないか。

（会長）

道の駅につきましては私共の市民の悲願でもあり、目標の一つとしていると思う。ご意見の通り、実際もう決定をしているので、あとはどれだけ動員できたかなどの指標に変わっていくと思う。お見合いシステムについては、目標そのものがおかしいのではないかとのことですが事務局いかがですか。

（事務局）

お見合いシステムの閲覧件数については、基本的に登録された方が窓口の方に来てシステムを閲覧した件数を挙げている。ただ令和3年の10月からシステムの機能が拡大し、自宅で見れる機能が拡大し、窓口に来られる件数は減ってきている状況もあるため、数値目標については検討したい。

（会長）

この結婚支援というのは非常に難しいですけれども大事なこと。

これにはぜひ今後IT化、技術化も含めていいアイデアがあればと思うがいかがでしょうか。

（事務局）

お見合いシステムにつきましてはオンラインでのお見合いというところも定期的に伸びてきている実態があるが、最終的には対面でというところがある。ここ数年、コロナの影響で難しいところがあったが、今年度は対面のイベントも行っていきたいと思っており、こういった機会をつくることが重要だと思っている。

（委員）

基本目標 1 の地場産品の売上額については、目標5,000万円で、令和3年度は2,927万円というふうになっている。諫早駅の自由通路のファミリーマートに地場産品を扱うコーナーが去年の10月頃にオープンした。業者の努力もあるが、かなりの売り上げがある。これまでは観光コンベンション協会が夏と冬に売り上げていた数字があがっていたと思うが、今度からはここの売り上げが入ってくるので目標はクリアできるのではないかと思う。委員の皆様もぜひお立ち寄りいただければ。

（会長）

個人的に観光物産のお土産売り場を、諫早駅の自由広場に常設してもよいのでは思っている。やはり旅行して帰るときの売り上げっていうのは大きい。長崎県では空港が一番、それと長崎駅。それくらいなのでもったいない。

（委員）

空港に行っても諫早の品物というのは少ない。諫早駅と各お店に行ってもらうしかないが、そういうのができただけでもよかったのではないか。

（会長）

適切な場所を得るっていうのはもう私は大事なことでございまして検討いただければと思う。

（会長）

DXの実装についてのKPIの数値目標なんて難しいそうだが。

（委員）

目標値の設定については定量的なもの、定性的なものがあると思うのでよく議論してほしい。

例えば、限界集落の件では、買い物に行けないとか、バスがすごく減ったとか、そういった設定から落とし込んで、居住者の方の生活視点に沿った目標設定を行ったらよいと思う。そこに市の政策とか財政的な支援とかを紐づけると非常にわかりやすいと思う。

（委員）

自治会の立場からですが、行政の側から我々に対して各地域の組織に対する要望というのをやってもらえないか。何か要望があれば何かしようという意欲はある。こういうのしてほしいという要望を自治会に出してもらおうと行政の持ち出しもあまりなく、うまくいく可能性がある。

今我々は防災の事に取り組んでいるが、これは行政だけではできない、地域が先頭に立って自助努力をしないとイケない。これと同じように自治会に要望を出してください。定例会のときなど、こういうのがありますだけでは動かない。こういうことをやってほしい、こういうことを頭に入れてほしいなどお願いしてもらいたいと思う。

（会長）

NPOの関係からなにかありませんか。

（委員）

KPIについてはコロナの影響があつてうまくいってないのも結構あると思う。どこの視点にたつてKPIを作っていくかはすごく難しいこと。実態とそのKPIの指標っていうのがあつてれば、生活者の視点でも実感として認識できるでしょうが、なかなかその辺が難しい。逆に言うと私はあんまりKPIに引っ張られない方がいいとも思う。むしろその生活者実感の中の、さっきの定量的、定性的という話もあるが、何か定性的なところも大事にしていくのもありだと思う。

どんどん人口が減少していく中で、どうやってある程度の人口を担保していくか。それに対してやっぱり有効なのは教育ではないか。結局、DXも含めて、どういう子供たちに育ててもらいたいのか、どういう未来になってほしいかみたいな。やっぱりよい環境となれば、都市部の子育てしたいっていう青年は戻ってくると思うし、その辺の若い世代の子育てに訴える新しい生活スタイルをもっと出していければよいのではないか。

諫早では、市民活動とかNPOボランティアは結構しっかり活動していると思う。みんなが結構汗かいているが、今度は一つの目標に収束させる、そういう旗振りというのが行政も必要になってくると思う。

（会長）

もう時間となりましたのでこれで終了いたしたいと思いますが、やはり最初は教育で始まり、最後は教育で終わりましたけれども、本当に教育は大事だと思う。

特に諫早は半導体の工場がまた出来るということで、就労などのKPIはクリアできるのではないかなと思う、情報技術者向けの教育が追いつかないのではないかなと思う。私は既存の大学、高校で良いので、情報技術者の教育をする場を作って、諫早で従事してもらうことを切に思っている。これで会議を終了いたします。